

フィンドレー大学奨学生 最終レポート

2012年度 機械工学系奨学生 澤井健

2012年8月14日、私はトレド空港に降り立ち、大学の職員の方と一緒に初めてのアメリカンハンバーガーとブラックビールを食して、アメリカ文化の洗礼を受けていました。そして、それから約9か月後の2013年5月15日に成田空港に舞い降りた私は、長旅の空腹と寂寥感を無にしようと、空港でにんにくラーメンに必死に食らいついていました。

一見、この両者は変わっていないように見えます。いや、むしろこの両者を比較することは、私にとって不可能です。なぜなら、彼らはどちらも私自身であり、この9か月間、日々自分が外部から影響を受け、刻一刻と変化していたので、その積み重なった己の変化を一度に感じ取ることはできないからです。そのため、この最終レポートでは、私が何をオハイオ州のフィンドレーでして、どのようなことを感じ取ったのか、ということフィンドレー大学、NBOでのインターンシップ、そして、埼玉親善大使としての活動の3つの柱から書いてみたいと思います。この最終レポートが私自身にとっては己の軌跡の回顧、そして、読んでくださった皆様には留学に対する情熱の導火線、もしくはストレス解消になればよいと願っています。

1. フィンドレー大学から受けた刺激

まず、私が受けた刺激の源泉としてあげられるのはフィンドレー大学です。正直、フィンドレーに住んでみるまで、フィンドレーに対してあまり良い印象を持ち合わせていませんでした。なぜなら、フィンドレーというアメリカの地名は日本であまり有名ではないし、現代のテクノロジー（主にグーグルマップ）を駆使して、街並みを覗いてみても、あまり若者を興奮させるものではなかったからです。ただ、実際にこの地に9か月間住んでみて、「フィンドレー」という言葉が付くすべてのものが好物になりました。それでは、私がこの地で何をしてきたのか振り返ってみたいと思います。

IELP（英語集中クラス）での奮闘

フィンドレー大学における第一学期目は、IELP という英語クラスを受講していました。このクラスでは、英語におけるエッセイの書き方、学術論文の読み方、メモの取り方、プレゼンテーションの仕方などを学びました。ただ、英語という言語における種々の方法論をいくら学んでもそれらは表面的な事柄でしかなく、僕の脳髄にしわを刻むような新しいことではありませんでした。このクラスではこれらの方法論よりむしろ、世界中からフィンドレーに集まった留学生たちとの出会いが私にとっては大きなことでした。

クラス初日、日本でいつも時間にぎりぎり（もしくは遅刻）だった僕は、時間に厳しいアメリカ社会になじむために、5分前に教室に入りました。すると、そこにはアジア系の男女、それに加えて、頭部をスカーフで巻いた女性が数人席についていました。この瞬間、初めてイスラム圏の女性を目にしたので、正直彼女たちに対して何を話したらいいのか、どのような振る舞いをしたらいいのか、まったくわかりませんでした。

しかし、フィンドレーでの日を重ねていくうちに、頭部や口もとを布で隠しているようが、信仰している宗教が異なろうが、すでに婚約・結婚しているようが、彼氏がいようが、関係ないということを、身をもって感じ取っていきました。彼ら・彼女たちは私と同じヒトという霊長類であり、ほぼ同じ笑いのツボを持っているし、同じように宿題を嫌い、同じようにスマートフォンを好みます。そのことがわかってから、日本以外の国出身の人々と躊躇という障壁なしにコミュニケーションを挑むことができるようになっていきました。



手に汗を握ったサンクスギビングランチ（IELP クラスメイトのみんな）

ただ、それと同時に、この手のコミュニケーションをとる際に、英語力を抜きにした知識・技術が大切であることに気づきました。英語は電話のような、ただの一つのコミュニケーションツールであって、それだけでは何も生まれません。それに付与すべきは、その人しか持ちえない知識、誰もが驚愕・嫉妬するような技術です。

世界中から人々が集まる場所に身を置くと、日本出身である私は、その場において、日本代表と化します。サッカーが別にうまくなくても、誰にでも日本代表になりうるのです。その際に、日本の文化・時事問題について周囲から質問が投げかけられることがあります。私の場合、日本の女性運動のビデオを授業で作成し、発表した際、日本の天皇制についての質問が投げかけられました。恥ずかしながら、日本において女性が天皇になれるかどうかすら、知らなかった私は、曖昧に笑うという最悪の選択肢を取らざるを得ませんでした。この恥ずかしすぎる経験を経て、自国に関することをこたえられなかったときは、もれずに調べ、それを英語で表現する練習をするようになりました。己の恥辱・挫折を次に生かす姿勢をここで学ぶことができました。

学部の授業からの敗走

続く第二学期目は、フィンドレー大学の学部の授業を受講しました。挑戦した科目は、天文学、経済学、地質学、そして演劇の4つです。なぜこれらの科目を選び取ったのかというと、日本の大学における専攻とは性質を異にしている一般教養科目をとることで、己の教養を深めてみたかったという動機と、残念なことに大幅に出遅れた科目登録による残存した不人気科目を取らざるを得なかったという2つが起因しています。

まず、学部の授業を通して感じたのが、授業の質の高さです。これは、大学側が一方的に生み出しているものではなく、学生・教授の双方から染み出ているものでした。授業に出席している学生は、時々スマートフォンをいじることがあっても、ほとんどの時間、真摯な姿勢を保ち、教授の講義に耳を傾けていました。授業中に寝ている学生はほとんどいなく、質問があれば、授業の進行具合に臆することなく、教授に質問やコメントを投げかける積極的な姿勢を見せていました。

また、教授も教授で、授業に対してすごく真剣に向き合っていました。初日の授業で目にしたシラバスは、ほんとうに緻密そのものでした。授業開始から期末テストまで、どのような進捗で何を学んでいくのか、ということが詳細に記載されていました。私が通っていた大学では、学期末テストの日程など、テスト2-3週間前にならないとわからないありさまだったので、テスト日程がすでに記載されているシラバスは私にとって衝撃的でした。

この授業の質の高さが相まって、私はこの学期ほんとうに苦しんでいました。課題を片付けても、片付けても、次々にあちらこちらで新たな課題が発生、派生し、常にやらねばならぬことを抱えていました。この学期終盤は課題が集中しすぎて、ほぼ徹夜で図書館にこもる日々が続きました。この忙しさに加えて、私の英語力がネイティブの学生に比べて圧倒的に劣っていたため、この言語の差を埋めるためにも、さらなる努力を重ねなければなりませんでした。この経験を通して、己の英語力・マネジメント能力の不十分さ、そして、アメリカの大学の教育の質の高さを、肌を持って感じました。いつか、アメリカに戻って大学などの教育機関におけるリベンジを果たしたい欲がむくむくと立ち上ってきたのも事実です。



苦しみすぎた地質学の授業

それに加えて、アメリカの学生に囲まれ授業を受けることで、日米の学生間の相違点を発見しました。アメリカの学生は、しっかりと独立性を維持していました。日本の大学でだらだらと存在しているような同学年の横のつながりや、相互扶助のような馴れ合いが存在していませんでした。一つのクラスの中を解剖して

も、1年生から4年生、またはそれ以上の学生がふんだんに違和感なく入り混じっていました。そのため、彼らは互いにノートをコピーさせたり、レポートを見せ合ったりするなどの一種の慣れ合いをしていませんでした。その代わりに、図書館に設置されたスタディルームで、集団で議論し合いながら、勉強に励んでいました。一度も行列のできたことのないコピーマシーンがそれを物語っていました。

最後に感じたのが、留学生に対する無関心さです。ほとんどのアメリカの現地の学生は、英語が下手な留学生を、ただの足手まといととらえており、極力さける傾向にありました。グループワークで課題を進めていく地質学の授業では、僕の隣に座っていたアメリカの学生が、課題に取り組むとわかった瞬間に、違う席に移動するという事もありました。これは、先ほど述べた独立性に起因するのかわかりませんが、たしかに、プラスかマイナスの勘定で物事を考えたら、留学生と関わるということはマイナスでしかありません。ただ、正直、現地の学生と比べて劣勢であるからこそ、周囲からの助けが欲しかったですし、人種的な疎外感を感じているからこそ、現地の学生ともっと話がしたかったのです。

ただ、ふと、私が日本において、日本に来ている留学生に対してどのように振る舞っていたのか、ということ振り返ると、自分が全くアメリカの学生と同じことを彼らに対してしていたことに気づきました。これとって、留学生に対して関心を払わず、日本語があまり上手でない留学生とプレゼングループを組まぬように計らったり、日本語が達者でない講師の方をかげで笑ったりしていました。しかしながら、このアメリカでの経験から、留学生というか、日本に来てくれている外国人の方に対する己の行動様式を変えようと決心しました。

その一環として、日本に帰国してから、私が通っている大学の日本語クラスにボランティアとして参加してみました。そのクラスの学生たちは、日本語を勉強してからまだ数か月という方たちでした。その方々と日本語で会話してみて、私がアメリカで言葉を交わしたネイティブの方々の気持ちが少しわかりました。なるべく簡易な日本語を使うように試みますが、各々の留学生の言語力は表面に露出してこないものなので、どのレベルまで引き上げたら、互いに効率的なコミュニケーションがとれるのか、ということ始終考えなくてはなりませんでした。

ただ、このような困難が横たわっていたとしても、日本に来ている留学生と関わることは、とても刺激的でした。彼らは、日本ではない国で育ち、違う言語で

学習し、異なる文化で教育され、食べるものも日本食ではないため、日本人と異なる考え方を持っていたり、態度を取ったりすることは当然です。それでも、ひとつだけはっきりしているのは、広い地球で偶然この時代、この時期に出会い、瞬間的に同じ教室の空気を吸っている、これだけで十分ではないかと考えるようになりました。これから大学に在籍している間は、なるべく多くの留学生と関わり続けたいと思います。

各種イベントより生じた自国への誇り

フィンドレー大学では、留学生のための様々なイベントが存在していました。大学側としては、比較的白人社会であるフィンドレーに留学生の多様性に富んだ風を入れようという意図があったのではないかと思います。中でも印象に残ったのが、各国出身の留学生同士が一つのグループを形成して、各国代表としての出し物を発表する「International Fashion Show」と「International night」です。この両者のイベントは、大学に集うフィンドレー一般大衆に向けて、留学生の出身国の文化を紹介するために、さまざまな出し物を催すというものでした。

このイベントで、私が面白いと感じたことは、ある国の出身の学生が一定数集まると、そこに国独自の色がにじみ始める、ということです。グループの構成人の性質にもよると思いますが、今回、2回イベントが存在していたため、それを確証するには十分でした。たとえば、サウジアラビア出身の学生が集まると、彼らが誇りに思っている伝統衣装のお披露目を、なかば制限時間を無視して続けます。また、アフリカ大陸出身の学生が集まると、有酸素運動に酷似したダンスのような動きに収束していました。それでは、私たち、日本グループはどのような傾向があったのかというと、ずばり、非凡への傾倒、でした。たとえば、単に日本の伝統衣装や近代のサブカルチャー衣装を大衆に公開するだけでは、退屈であると考え、日本独自の衣装のお披露目と同時進行で寸劇（擬似時代劇）を挟みました。また、単にはっぴを着てソーラン節を踊るのではなく（はっぴが手に入らなかったのも一要因）、日本チームの各メンバーが狂喜に満ちたコスプレで踊り散らしていました。私は、この日本グループの方向性がすごく好きでした。それと同時に、日本人であることを誇りに思った瞬間でした。



ピクセル数が少し足りない思い出のソーラン

2. NBO インターンシップから受けた刺激

フィンドレー大学と同様に、私に多大なる影響を与えたのは、ニッシンオハイオブレイキ（NBO）でのインターンシップです。午前はフィンドレー大学での授業、そして午後はNBOでのインターンシップという毎日をひたすら繰り返していたため、NBOでの経験が私に大きな影響を与えたのは至極当然のことです。それでは詳細に見ていきます。

日米両国のビジネス環境の違い

NBOで9か月間、インターンとして働いてきて見えてきたのは、日米の会社間におけるビジネス文化の違いです。NBOは、アメリカに進出した日本の企業なので、その両国の勤務環境を垣間見ることができました。

その例として挙げられるのは、会社との契約方法の違いです。アメリカ人の方は、会社から仕事内容を詳細に記載されたジョブディスクリプション（Job Description）に沿って仕事をします。そのため、ジョブディスクリプションに、勤務時間が午前7時から午後4時と記載されていたら、一部の緊急時を除いて、ほぼ4時に従業員の方は帰宅します。それを実証するがごとく、私たちインターンが午後3時半ごろに、アメリカ人のエンジニアの方の元へ質問に行くと、もうすぐ4時になるという理由で断られてしまいました。逆に、同じフロアで働いて

いた日本人のエンジニアの方は、ほぼ毎日僕らインターンより帰宅時間が遅く、ときには夜中の3時、4時まで働くことがあるそうでした。日本人の方には、仕事内容を詳細に記載された書類などは存在せず、一人の従業員は会社に属することになります。そのため、日本では個々人の利益よりも、会社としての利益を優先せねばならないのです。もし、工場の製造ラインで問題が発生したとしたら、問題が解決するまで勤務時間外でも帰ることはできません。

この仕事環境の違いが同時に、彼らの家族に対する向き合い方に現れています。アメリカ人の従業員の方々は、仕事デスクやロッカーに家族の写真を張り付けていることが多いのですが、日本人の方のデスクは白くひどく無機質なものでした。勤務時間が明確に決まっており、定時に帰宅することができるアメリカ人の方々は、仕事後のアフター5を彼らの家族のために費やすことができます。ただ、アメリカ人の方は、家族と過ごす時間が日本人の方よりも長いにも関わらず、離婚率が日本と比べるとべらぼうに高いということは、ヒトの宿命をまじまじと体現しているようです。逆に言ってしまえば、家族という関係はそう長くは続かないもので、日本人の方は逆に家族という組織から離れているために、家族という関係を長期間保つことができているのではないかと考察します。

会社に存在した日米の文化間の差異

NBOはアメリカに進出した日本発の企業です。そのため、会社の文化は日本とアメリカの両国の文化が丁度よい妥協点で融合しているような印象を受けました。たとえば、日本の文化の一例として、制服が挙げられます。オフィスで事務系の仕事をしていようが、製造現場でラインリーダーとして働いていようが、みなが同じ白い制服を着用していました。一方、アメリカの文化というのは、ファーストネームが記載されたネームタグを始め、休憩室に設置してある自動販売機の売り物、先ほど述べた勤務時間に対するとらえ方などがあります。

しかしながら、会社の文化の終着点として互いに妥協できていても、日米の従業員間には壁のようなものが存在しているように感じました。なぜなら、休憩室では日本人同士で固まり食事を食し、さらに、日本人駐在員の方が帰国する際に開催された送別会では、アメリカの従業員の方は誰一人として招かれていない、という状況が目の前に広がっていました。さらに、会社内で日米両国の方々が互いに並んで話す、という光景を確認することはものすごく稀でした。

このような会社における日米両国の溝を埋めるために、私たちインターン生は、NBOにおいて日本語クラスを開催しました。このクラスは日本の言語習得を目的としたものではなくて、ものすごく実用的な会話、それに加えて、NBOという仕事環境で頻出する日本語（安全メガネなど）を生徒として出席してくださった従業員の方に教えました。また、それに加えて、日本の文化を知ってもらおうと、日本の伝統行事、現在の風習、ビジネス環境の相違点などについてのプレゼンテーションを行いました。集まった生徒の数はそれこそ多くなかったのですが、集まってくくださった生徒の方々は、日本文化のプレゼンに真摯に耳を傾けてくださり、さらには、鋭い質問を飛ばしてくださったりしました。私たちインターン生の試みが、NBOで働く従業員の方々にどのような影響を及ぼしたのか知る由もありません。ただ、この経験を通して、他国にビジネス進出した側、そして、彼らを受け入れた側の両方からの文化間の差異を埋めるための歩み寄りのような譲歩が必要なのではないか、と思うようになりました。特にアメリカでは、仕事とプライベートをとんでもなく切り離す文化なので、難しいかもしれません。しかし、私たちがまず歩み寄れば、何かしらの化学変化を待つことができると思います。このような、ビジネス海外進出の際に生じる文化間摩擦を、学生という身分の間に、肌で感じ取れてとても良い経験ができたのではないかと思います。



日本語クラス イン NBO

恥の捨て方

このインターンシップでの経験で、良い意味で、己の内部に沈殿していたプライドという塊を排除することができたのではないかと思います。NB0でインターンシップを開始した当初の頃は、アメリカの従業員の方に質問する、という単純な動作さえも恥ずかしくてできませんでした。なぜなら、自分が理解していない、ということを知人に知らせたくない、という思いと、相手からの返答がわからない、という状況を創り出すことに対する恐怖という二つが入り混じっていました。そのため、工作機械の内部に生じた問題をアメリカの従業員の方々が次々に解決していく様子を、近くで指をくわえて眺めるほかにありませんでした。

ただ、時間が経つにつれ、このいけ好かないプライドを捨て去ることができるようになってきました。それは、NB0の製造ラインで働く人々が持っている技術・知識が、自分には到底及ばないものだ気づいた、という要因と、無駄なプライドを捨て多くの恥じをかく姿勢でアメリカ人の方に接するときのほうが彼らとのコミュニケーションがうまく行ったという自信の経験を積み重ねたからです。そのため、インターン終盤では、もはや自分は何も持っていない青二才だということを自覚し、誰にでも恥じを捨てて質問をすることができるようになっていました。



羞恥心の向こう側

その結果、どこの部署でどの製造ラインで働いていようが、一人一人の従業員の方々に敬意を持って接するようになりました。そのため、当初はアメリ

カ人の方が言っていることが理解できない、という状況を恐れてできなかった彼らとの雑談も、積極的に挑むことができるようになっていました。これが功を奏して、インターン終盤では、彼らからたくさんのアメリカのスラング、アメリカンジョークを吸収できるようになっていました。そして、それらを他のアメリカ人の従業員の方に対して使うことで、彼らを笑わせることを覚えました。このときから、水面に水滴が落ちて波紋が広がるがごとく、次々にNBOでできることが広がっていきました。このようなことも含めてたくさんのことをインターンシップ経験から学ぶことができたと思います。

3. 埼玉親善大使としての活動から受けた刺激

埼玉親善大使。この肩書きを持ったことのある者の数は、留学経験者の数と比べると、ものすごく希少なものであると思います。私の顔の狭さか、それとも親善大使の稀有さが起因しているのか知りませんが、私の知り合いの方に埼玉親善大使だった方は、この埼玉奨学生の方以外に知りません。

そうです、この奨学金プログラムで一番特異な経験をさせていただいたのは、埼玉の親善大使としての活動です。ここでは簡単に、親善大使としてオハイオ州界隈でどのような活動をし、如何なる刺激を私が受けたのか、ということについて触れたいと思います。

数々の偉人との面会

一つ目にあげられるのが、いわゆる政界人との面会です。埼玉県の親善大使として、二人の偉人の方に出会いました。一人目は、フィンドレー大学のフィンドレー市の市長であるリディア・ミハーリックさんとの出会いです。二人目は、デトロイトの日本領事館の総領事である、松田邦紀さんです。ただ、偉人の方との面会と言っても、食事を共にしたわけでもなく、一緒の屋根の下で暮らしたわけでもありません。私たちの会合は、至極簡単な自己紹介から始まり、フィンドレーと埼玉県の現在も残る関わり合いについて議論したり、なぜ、埼玉県といまもなお交流が続いているのか、ということについて語り合ったりしただけです。

あまりにも出会いの規模が小さすぎて、この出会いが私自身にどのような影響を与えたのか、私自身、これだ、と言えるような定かなものはありません。ただ、多くの民衆に認められるような方々が発するオーラ・威圧感のようなものを面前1mで、肌で感じ取ってきました。彼らから染み出る己に対する自信、語りの巧みさ、そして、青々とした親善大使たちに対する多大なる慈悲のようなものをヒシヒシと感じ取ることができました。半ば無意識ではありますが、彼ら、彼女らのようにいつかになりたいと思うような、模範が己の心に宿るようになりました。

また、このようなある種の偉人を目の前にする度胸をつけることができたのではないか、と思います。なぜなら、2012年6月に行われた留学出発前の壮行会で埼玉県の上田知事を目の前にしたときは、どこもかしこも縮こまる勢いでした。しかしながら、留学終了間際に訪問した松田総領事を前にしたときには、約1年前に感じた萎縮感のようなものはすっかりと消え去っており、むしろ、挑戦的な態度で面会することができるようになっていました。そう言った意味で、すごく興味深い経験をさせていただきました。



松田総領事と奨学生らの記念撮影（デトロイト総領事訪問）

埼玉県代表としての広報活動

二つ目に挙げられるのは、埼玉県代表として行った広報活動です。なかでも、最も規模が大きく、緊張が最高潮に達したのが、2013年4月にロータリークラブの会合で、オハイオ・埼玉県奨学金についてのプレゼンテーションを行ったときでした。

ロータリークラブとは、国際親善大使奨学金を提供している国際規模の社会奉仕団体です。私たちフィンドレー大学奨学生は、この団体の会員の方々に、拙い英語ながら、オハイオ州埼玉県奨学金の概要、自らがこの奨学金プログラムで得た経験・洞察を必死に訴えかけました。個人的に、発表メモを紛失した珍事も相まって、このプレゼンテーションの前の心臓の高鳴りはここ10年間で最も高鳴っていたのではないかと思います。この発表で多大なる笑いこそ取れませんでした。発表終了後には、数々の参加者の方々から賛辞をいただき、埼玉県代表として非常に鼻が高かったです。ただ、この経験を通して感じたのが、己に関する事柄を、世界基準で認められるように無難、しかし魅力的に伝える、というむずかしさを知りました。ある国・団体の大衆に対しては、どのような構成・ユーモア・行動様式を持って面前に立てばいいのか、ということのを常に考える必要があることを悟りました。



ロータリーでの発表後、安堵の表情を浮かべる奨学生ら、とミハーリック市長

親善大使として書き続けたレポート

最後に僕が刺激を受けたのは、この親善大使報告レポートです。この毎月親善大使に課されるレポートは、とてもいい意味で各親善大使の学生に圧力を加え続けていました。私たちは、報告レポートに書くことができるネタを探し求めて、日々、留学生活での奮闘を繰り返していました。そのため、このレポートの存在は、奨学生にとって吹き荒れる追い風のような存在でした。

個人的に、私は、このレポートの存在によって「書く」という所業に愉しさを見出すようになりました。2012年8月のレポートを執筆するまで、私は己から情報を発信するということはず、ただひたすらに書籍などから情報をインプットすることに没頭していました。しかしながら、この毎月の報告レポートを執筆し続けることで、自らアウトプットする快樂・自由、それに加えて、他者からのフィードバックを受け取ることから生じる輪廻を彷彿させる書き言葉の不死性を、いつしか愛おしく思うようになりました。

この「書く」という行為に出会ってから、私の人生に対するとらえ方が少しながら変化しました。私は、従来、己の価値がぐらつくような危険、冒険を避けて通り、ただ嵐が去るのを小屋で読書をしながら待つような人間でした。しかし、今は、日常において分岐点が多数存在するような状況に遭遇したときは、あえて、冒険の道を選び、その体験を書き言葉でアウトプットする、というモチベーションが心に宿るようになりました。そのため、たとえ、間髪いれず穴に入りたくなるような羞恥を感じることもあっても、それを私なりにユーモアを含めてアレンジして好きな形で他人に披露し、他人を笑わすことができればいい、と思うようになりました。このように、人生に対するとらえ方を変えてくださった埼玉県レポート、また、この課題を奨学生に課すことを思いついた埼玉県職員の方には個人的ではありますが、非常に感謝しております。

4. おわりに

ここまで長々と、私のフィンドレーにおける留学生活を振り返ってみて、ハンバーガーを無理やり頬張る9か月前の私と、ラーメンに涙を流す現在の私に、何か違いがあるのかどうか検証してみました。ただ、ここにきて気づいたのですが、

そんなことは誰にとってもどうでもいいことで、誰も定量的に評価するはできません。

そんなことよりも大切なのは、今後将来、私がどれだけ周囲の人々に良い影響を及ぼし、どれだけ多くの人の笑顔を創造することができるのか、ということです。今後は、この留学生活で出会った友人、ライバル、同僚、ボス、チキンウィングなどを忘れないよう、一步ずつゆっくりと己のペースで走り続けたいと思います。

最後に、留学のチャンスをくださった埼玉県庁とその職員の方、無言としかめ面で背中を押してくださった両親、アメリカという天地で生活を共にした同奨学生の荒瀬君、よきアドバイザーであった川村先生、そして、フィンドレーで出会ったすべての人々に感謝の念を申し上げます。ほんとうにありがとうございました。